

学者であり天文気象学者でもあつた Adolphe Quetelet (1796—1874) は天文台を作ることを提唱し 1828 年に新しく設置することに決まった Royal Observatory の台長に任ぜられた。ただちに彼の設計で工事が進められたが当時の社会状況はオランダとベルギーで言語や宗教習慣が違つたために融和せず、オランダの横暴に対する不平がたかまって独立運動が起り 1830 年の 7 月革命の結果 10 月には仮政府ができてレオポルド 1 世を王とした。この革命のために天体観測をする器械は長い間備えることができなかつた。そこでケトレは当時ヨーロッパにあった各 Observatory の一業務とみなされていた気象に対して特に注意を向けた。1833 年 1 月 1 日から気圧・気温・湿度等の普通観測を始めたほかに注目すべきことは日射・地中温度・植物季節等の特殊観測を行ったことである。彼の眞価は観測のみならずまたその結果から確率論を使って法則性を出そうとしたことである。

3. シノプティック時代。ケトレの死後 1876 年には Jean Hauzeau (1820—1888)* が第 2 代目の台長になると天文と気象の仕事を分離し、気象の方では気候を Albert Lancaster (1849—1908) にまかせ、天気予報を出す組織を作るために Van Rijsselberghe を招いた。ベルギーでの公式な天気予報は 1876 年 9 月 26 日に始まり、同時に Bulletin Meteorologique が出された。François Van Rijsselberghe (1846—1893) はまたメテオログラフや自記温度計を發明している。1883 年に Houzeau が辞任の後天文学者の François Fölie (1833—1905) が第 3 代目の台長になったが彼が去つた 1897 年にはベルギーだけがまだ欧州で天文と気象を同一管理下に置いていた国だった。

しかし 1898 年には Service Météorologique として独立し Lancaster がその台長になると共に aerological section を作ろうと骨折り、まず風をあげはじめたがこれは予算の不足ですぐ中止してしまつた。19 世紀の後期からレオポルド 2 世のもとにアフリカのコンゴ河上流域の開拓が初められ、1895 年には Société royale de Medecine publique の依頼で Lancaster と E.

* 彼の経歴は面白い、1843 年にブラッセルのオブザーバトリーに入つたが 1849 年の異動で解雇になり一時ハリーに住んだ。しかし 1857 年には米国に渡り南北戦争当時には黒人新聞を出している。その後 1876 年にブラッセルに帰り台長の職に就く。

朝日新聞重要紙面の七十五年

朝日新聞社の創刊 75 周年記念に出版された重要紙面の七十五年は明治 12 年 (1879) からの歴史を概観するもので、いろいろな意味で興味深いものがある。おさめられた重要紙面は 150 面。清国へ宣戦、日露戦争起る。二・二六事件起る。米英に宣戦を布告、太平洋戦争終る等の記事の中に、明治 18 年大阪の洪水、明治 21 年磐梯山の噴火、明治 21 年濃尾の大地震、明治 29 年三陸

Meuleman がベルギーコンゴの気候を調べ “Le climat du Congo” (Brussels 1898) を出したがこれはこの方面についての最初の詳しい研究である。その後コンゴに気候観測所を作ろうとする試みは何回も行われたがその予算案はいつも成立せず、やっと観測網が出来たのは 1911 年以後である。

1908 年には Jean Vincent (1851—1932) がサービスの第 2 代目の台長となり、1913 年にはサービスが Institut royal météorologique という自治体組織に改まった。翌 1914 年に第 1 次世界大戦が始まるとまもなくその 8 月に中立を侵してドイツ軍はベルギーに侵入し、その後 5 年間はベルギー気象史上でも空白状態になっている。

1918 年 10 月にドイツ軍が破れベルギーの全土が解放されると共に気象事業も再開され、1919 年に Jules Jaumotte (1887—1940) が Institut の第 3 代目の台長になった。彼は特にシノプティック気象の発展に努め、当時 V. Bjerknes を中心に着々と作られつつあつたノールーエ一流の解析予報法に対してほとんどの国は非常に懐疑的であつたが彼は率先して 1921 年にベルギーの気象に導入した。彼はまた前線解析の研究によって低気圧の問題が 3 次元的なものであることを知つたのでこれを解くために飛行機用や気球用のメテオログラフを考案し、1921 年には 30 個の気球メテオログラフを飛ばしてその結果を J. Bjerknes に解析してもらつている。この頃から各国でも高層気象の調査研究が次第に進み、高層観測結果をシノプティックに扱う方法も形を整えられつつあつた。大戦後は気象の急速な発達に伴つてベルギーでも気象従事者数が急激に増し従つて研究報告も年毎に数を増していった。

1939—1945 年の第 2 次世界大戦によってベルギーに再びドイツ軍に占領されほとんどの測器が破壊されてしまつた。しかし終戦後は英国の気象局からラジオゾンデ観測所の設置など器材面を主とした積極的な援助もあり速かに活動を回復した。

この稿は Dufour が書いた “Sketch history of Meteorology in Belgium (Weather Vol. 6 No. 12, 1951) を骨子とし歴史的背景のもとに書きなおしたものである。(中央気象台)

地方に大津浪、明治 43 年ハレー彗星、大正 3 年櫻島の噴火、大正 12 年関東大震災、昭和 9 年関西水害等の記事がおさめられている。大阪の洪水については “大水の概況 去廿九日より卅日翌一日へかけ三日間小歇なく降つづきし暴雨の爲めに増したる川々の水勢は実に非常の事にて堤防の決潰したるもの家屋の破壊されたるもの橋々の流れたるもの其数夥しく一口に之を言えば……” といつた記事で 70 年の年数の開きがよく見られる。(I)